

永山：原点は自然です。自然って本当にわか
らないし、私達の手ではどうすることもで
きない、圧倒的な力を持つてゐる。夜になれ
ば暗くなるし、朝になれば明るくなる。雨も
降るし、寒くなったり暑くなったりもする。
そういう自然を人間が文明というものを使つ
て越えようとしていて、夜も明るいし、雨が
降っても濡れなくなつた。自然の中での体験
をなんらかの形で取り戻していくかないと、本
当に厳しいと思います。体験をせずに共感や
共有をすることは非常に難しい。身体感覚に

も達は、闇の暗さを知つてゐる。闇という言葉はいけないことのような語法になつてゐるけれど、闇は厳然としてある。一個人との付き合いの方を考えるときに、闇を知つてゐることってすごく大きなことだと思つています。そういう意味では、九州にいる我々にはまだまだ希望があるんじゃないのかな。全てコントロールしようとしたい場所で暮らしている若い人達には希望があると思っていきます。

落ちていくということは、それだけでも十分な価値があると思うんですね。その物語を作つていかなければいけないと思つています。

これは自分達のいる場所で、自分の暮らしがより楽しくなるという感覚で作つていくしかないと。その物語を作るお手伝いはできるのかもしないけれど、でも基本的には一人ひとりが作るしかない。そういう中に本当の豊かさや自分の物語があるということに気づいてほしい。「地方創生」みたいな安易な物語で何が起こせるんだろうって思いますよ。

山出…ガイドブックでエッフェル塔を調べて、現地に行って写真を撮って「ハイ次行きましょう」みたいな旅の仕方が多いじゃないですか。でも、それでは心は動かない。どうして自分自身の知識の中でしか、ものを見ようとしないくなってしまったんだでしょうね。

永山…体験はなかなかできないけれど、知識はすぐに手に入りますからね。知識の範疇で体験することを抑えてしまうんででしょうね。

「あ、エッフェル塔だ！ 知ってる」という、確認作業になってしまいます。

山出…僕らが意識しなくとも、テレビやラジオから情報が自然に入ってきて、世界で起きていることが一瞬のうちにわかつてしまう。そんな中で、感動する心を持ち続けるにはどうしたらいいんでしようか？

—自分の物語に気づいてほしい—

根ざした言葉を作ることが、私達の努力すべき点ではあるんですけどね。

からないけれど感動したり、そういう体験つてありますよね。



2010年公演「青空」より

一 身体的な体験によって蓄積される知識 一

—身体的な体験によって蓄積される知識—

永山：しょっちゅうですよ。でも、「わからんないけどなんか面白かった」とか「わからんないけど涙が出た」とか「わかんないけど笑っちゃつた」とか、わからないの後に『けど』と言わせたいですね。作品を見るときには「わからんない」って大事だと思います。作品を観て「わかつた」ということほど、怖いことはないと思う。それは自分の枠の中で收めてしまってことです。無意識に潜り込んだなにかがある日突然わかる瞬間があるとするならば、それはその作品の命がそこまで統いていったということでしょう。「わかつた！」となる瞬間にその作品の余地はその人の中で失われてしまうんじゃないかなと思います。